



これだけの勝利を重ねるチームだけに、走攻守すべてにおいて高いレベルにあることはいうまでもないが、そんな中でもこのチームの特徴を考えてみると、いくつか浮かび上がってくる。

まず1つ目は、エースピッチャー

長利くんのマウンドさばきだ。

春先は、ひじの故障で全開とまではいかなかったようだが、けがをしてる頃でも、彼のピッチングには相手打線が翻弄されていた。

これは、ピンチに動じない落ち着いたマウンドさばきにあると思う。ランナーが得点圏にいても顔色を変えずにストライクを投げ込んでくるのだ。相手にとっては、押しでも押しでも弱みを見せないピッチャーだけに、攻めにくいと感じているだろう。

2つ目は、どこからでも点を取れる打線。ふつうは下位打線になると、相手ピッチャーは一息つけるものだが、武田クラブ相手にそれは通用しない。全員が右バッターとはいえず、足のある選手もいれば、大きなものを打つ選手もいて、バラエティに富んだ打線は相手ピッチャーに息をつかせない。また、1番の長利くんは下位打線が作ったチャンスをものにする。第2の

## 3つの持ち味

クリーンアップ”。4番の石沢くんと合わせて二枚看板があるこの打線は、破壊力十分だ。

そして最後の3つ目は、互いに補い合っていることだ。

武田クラブの試合を見ていると、守りが崩れることもあれば、なかなか打てないときもままあった。しかし、そんなときでも試合を崩さないのが

武田クラブの強みといつてもいいだろう。ピッチャーの調子が悪く、点を取られたときは打線がカバーし、逆に打てないときは、ねばり強いピッチングと堅い守備で試合をものにする。そんな光景を何度目にしてきた。

武田クラブは、全員でその野球を実践し、「強さ」に変えてきた。



武田クラブには、同じ町の中に強力なライバルが存在する。中里小の子どもたちが所属している“中里北光クラブ”だ。

対戦のたびに熱戦を繰り広げ、昨秋の新人戦では大敗を喫した因縁の相手。その試合ぶりは僅差の試合展開が非常に多い。



中里北光クラブの試合巧者ぶりには、佐々木監督や長利・菅原両コーチも常に警戒している。3人が口をそろえていうのは「足を絡めてくる」野球をすること。たとえば、1アウト2、3塁の場面で、ふつうであればスクイズで1点と考えると、中里北光クラブは2ランスクイズで2点目をもぎ取ろうと走ってくる。守備の時間、ピッチャーも野手も気の抜けない時間が続く。

# ライバルの存在



強さのロミックス

そして堅い守り。佐々木監督は「今でも守備はかなわない」と賛辞を贈る。女子ながらエースピッチャーを務める古川さんをはじめバックの守りはレベルが高く、守備範囲も広い。この守備に何度となくチャンスをつぶされ、武田ク

ラブは苦しめられてきた。武田クラブは、その野球に打ち勝つべく冬から練習を重ね、「中里に勝たないと次はない」という意識で励んできた。ことあるごとに比較し「中里にこの動きだったらダメだ」「こんなことじゃ通用しないぞ」とハツパをかけてきたという。佐々木監督いわく「うまさがあり、小技があつて、スキのないチーム。点をやらない洗練された野球は、すばらしいの一言」と評する中里北光クラブ。その大きな存在に、ねばり強く食らいつく武田クラブ。この両チームが試合をすると、長年の野球ファンをうならせるような試合をする。「ライバルの存在なくして今の成績はなかったでしょう。それは強く思いますね」

新人戦での大敗で、中里に勝つことが目標になった武田クラブ。強い選手、チームにはライバルが存在するといわれるが、武田クラブの強さの一端は、中里北光クラブの存在が大きいことは間違いないようだ。



武田クラブの応援団は老若男女さまざま

もう1つの秘密

# 地域の“チカラ”

武田クラブには、もう1つ強さの秘密がある。地区の住民たちの力だ。

練習の送り迎え、試合での応援、祝勝会の開催など、武田クラブの応援団は非常に活発で、選手や監督・コーチを支えている。わが子の応援ともなれば当たり前の光景ではあるが、そこにおじいちゃん・おばあちゃんやOB・OG、元武田クラブの中学生、そして遠いところまであつても試合に足を運ぶ地区の人たちなど、

本当に支える人たちが多くことに驚かされる。

たとえば祝勝会の場でも、こういった人たちすべてが遠慮なく集い、武田クラブを中心にして屈託なく話題に花を咲かせている。

どうしてここまでの応援・支援ができるのか。誰かが先頭に立って応援団などを作っているのかと思いきや、

「特別な会はないんですよ。みんなチームワークがいいんです」

センターを守る米塚卯野さんのお母さんはこう語る。米塚さんは、自身が武田クラブに関わるようになった理由を

「何より野球が楽しい。子どもと一緒に泣いたり笑ったりして、同じ気分になれるのが一番の理由かな」と話す。

「みんな武田に住んでいるんだし、無関係ではないですよ。何らかの形で関わっている。野球を一緒に見て、一緒に喜んでもらえればうれしい」

子どもを思う気持ちはみんな一緒、親かどうかなんて関係ない——。地区の住民たちは、子どもたちの笑顔見たさに、今日も、そしてこれからも、応援を続ける。

## インタビュー

準備に奔走する母たちの中心人物

### 米塚 ゆかりさん

(センター米塚卯野さんの母)



—東北大会優勝の感想は？

うちは選手層が薄いので、ケガや体調不良が最大の敵。35度を超える暑い中、具合が悪くなるようなこともなく、最後までがんばってくれたことがうれしい。

—応援しているときはどんな気持ち？

打っているときは楽しくて、接戦になるとドキドキ。

手に汗握ってます。勝った瞬間は「は～よかった」って感じで肩の力が抜けます。

—娘さんが野球をやっていますが、どうして野球をやらせようと思いましたか？

上のお兄ちゃんが野球をやっていたのもあるけど、一番のきっかけは当時武田クラブにいた女の子3人に誘われたこと。「人が減ってきて新人戦できないから入って」って頼まれ、私も「バットボーイならできるんじゃない？」って話したのがはじまりでした。最終的には本人がやりたいって言うてきました。

—武田クラブのキーマンはいますか？

佐々木監督！

とにかく熱血、熱い男。泣くし、吠えるし、叫ぶけど、愛がある。先生は子どもたちのためにがんばるし、子どもたちも先生と一緒にがんばろうとする。その歯車がかみ合えば、武田クラブは強い。

—その熱血指導の佐々木監督をどう思います？

大好き！（奥さんゴメンナサイ）それから感謝です。

—地域のたくさんの方が支えているが

いろんなサポートに感謝ですが、特に中学生の先輩たちがたびたび練習を見してくれるのには、心から感謝したい。

—子どもたちへメッセージを

君たちの野球には、まだまだ先がある。野球だけでなく、いろんなことをがんばってほしいです。



ファインプレーの卯野さんを迎えるナイン  
この笑顔が見たくて、彼女は応援を続ける

華々しい成績を取めた武田クラブ。しかし、クラブは1つ大きな問題を抱えている。来年のチーム編成だ。

現在の武田クラブには13人所属しているが、そのうち6年生は7人。来年試合を戦うためには4人の入部が必要になる。少子化という時代の波にあって、チーム種目の人数集めは大きな課題といえる。

この点について、佐々木監督や長利・菅原コーチは「うちだけでなく、どこの学校にも存在する問題。いずれは町1つでのチーム編成になるのでは」と、共通した考えを示しつつも、「とにかく武田クラブをどうやって存続させるか。いかに、子どもたちが野球をできる環境を残すか」と佐々木監督は語り、そのことに心を砕いている。

米塚さんも「武田クラブは残したい。後輩たちが野球って楽しいと思ってくれれば」と存続への期待をかける。また、大人たちだけでなく、今年で野球部を去る6年生が、入部を呼びかける予定だという。

不安を抱えながらも、前を向いて歩んでいる武田クラブ。子どもたちの笑顔のために、何とか野球をやらせてあげようという姿が、そこにはあった。



# 前を向く武田クラブ

野球を続けるために――

## 監督・コーチに聞く



長利 俊司 コーチ (左)

菅原 光徳 コーチ (右)

ーコーチの役割とは？

**長利&菅原** 先生の目の届かないところをサポートする感じ。子どもによってはなぜ叱られたのかわからないことがある。失敗した原因を理解させるのが大事。

ー佐々木監督をどう思いますか？

**長利&菅原** 家庭、大丈夫なのかなーと思ってしまいうくらい野球に情熱を注いでいる。チームの子どもを優先して考えている。練習は、毎日同じことをしない。試合での反省点を練習に持ってきて、課題を設定している。工夫しているなーと思う。

ーチームの子どもたちへ一言

**長利** 野球の練習・試合で培ったものは、君たちの大きな財産。スポーツだけでなく、学業面でも生活面でもそれらを生かして行ってほしい。

**菅原** 苦しいときにがんばれる人間になってください。事実、今までそうやってきた君たちだから。



佐々木 謙一 監督

ー今年の成績を振り返って

春の学童野球、県大会にはじまり、夏の東北大会優勝と続いた。東北大会の決勝は0-3で負けているところを逆転勝ちでものにした。こんな経験はこれまで野球をやってきた中で初めて。ここまで成長してくれて、本当に大きな喜びを感じた。

ー武田クラブの特徴は？

スーパースターはいない。そのためか、補い合える野球をできるのが特徴だと思っている。誰かの調子が悪くても、誰かがカバーしてくれる。そんなチームだと思う。ー来年のチーム編成をどう考えていますか？

とにかく試合をできる環境を残したいというのが願い。なかなか難しいこととは思いますが、これから考えると町のサポートなどがあるとうれしいと思う。

ー子どもたちへ一言

野球に限らず、やればできるということを忘れないでほしい。この気持ちがあれば、人としていける面でも成長していけると思う。